

自然館だより

つのしま自然館開館二〇周年

記念行事を開催しました



二〇二三年(令和五)、十一月十一日(土)、つのしま自然館開館二十周年の記念行事を開催しました。参加者は豊北町内外から、総勢四十一名でした。

つのしま自然館は、ビジネスセンターとして、二〇〇三年(平成十五)四月開業いたしました。さらに、遡ること一〇年前、一九九三年(平成五)、豊北町自然観察指導員会事務局が町役場内に設置されました。

つのしま自然館開館に伴い事務局を自然館に移し、当初、年六回の観察会を実施しました。(現在は年四回の観察会を実施)当日は、山口県、下関市の機関、地元の諸団体の関係者、参加者の皆さんが一堂

第10号

令和6年2月

発行

豊北町自然
観察指導員会

〒759-5332

下関市豊北町

角島 893-1

つのしま自然館

083-786-0430

(兼 Fax)



【みつと魅力】と題して、角島の海岸で見つかる大きくても5mm程度の海の宝石と言われる貝のお話をしていただきました。

に会しました。式典の挨拶では、広瀬徹会長が館の二〇周年を振り返り、「角島大橋開通により、島の利便性は良くなったが、観光客が多く訪れることにより、自然環境の変化が見られた。現在SDGsの機運が高まりを見せている。来館者の感謝の言葉や笑顔を励みとして前進する」と力強く述べました。記念講演では、萩博物館、統括研究員の堀成夫博士(水産学)が【世にも不思議な貝：ユリヤガイのひ



た。ユリヤガイの巨大模型も展示しました。

記念講演が終わって、大浜海岸に出て、堀先生とユリヤガイ観察会を三〇分ほど行いました。

お話の中で、いろいろな種類の貝の名前について、漢字で表記されていることに触れて、これは、日本人が自然に対する感受性の豊かさの表れではないかと話されました。

堀先生は、絶滅したと思われていた見島のユリヤガイを水産大学の村瀬昇教授と共に現在も生息していることを二〇一九年(令和元)、約三〇年ぶりに再発見しました。

角島の瀬戸のわかめは人のむた
荒かりしかど我とはにぎめ

詠み人知らず

万葉集 第16巻(3871)

角島の豊かな自然を

丸ごと楽しみました



令和六年、二月三日（土）…節分、打ち上げ貝観察会を開催しました。参加者は、町内外から二十八名でした。当日は、前線の影響で昼過ぎ頃から雨になる予報が発表されていたので、時間を効率よく使うよう考えました。講師は杉村智幸さんです。長年（約三十年以上）、角島周辺海域に生息する貝の生態の研究者として、有名です。まず、角島の現状について、説明がありました。そして、「対馬暖流は角島から向津具半島、見島沖を経て日本海を北上し、青森県まで達しま



す。高知県沖で多く見られるタカラガイは日本海の角島周辺でも高知程ではないがある程度見られます。これも対馬暖流が関係しています」と。さらに、先生は過去、太平洋沿岸の黒潮の流れを実際に観察し、黒潮が水の塊であること、川と黒潮の流れが分かること、その迫力に驚かされたとの事です。対馬暖流が角島の貝を作っている。山口県では、瀬戸内海側では見られない貝類が、響灘、日本海地域に対馬暖流が関わることにより見られ、山口県の貝類相をより複雑なものにしているとの話がありました。また、英国の軍医アーサーアダムス（二八二〇～一八七八）は、二度東洋に航海して船医として働き、その傍ら水路調査の際に貝類を採集し、調査、研究をしました。特に山口県見島沖等で採集を行い一六三種の新種の貝を発表しています。さらに、講師の杉村先生も自身の名前を冠した新種の貝をいくつか発表されているとの事です。日本海の



固有種は多様な生物相に彩られています。今日は降雨が早まる予報でしたので、講義を少し短縮して採集に出ました。参加者は一桁から七〇代まで幅広く、また、リピーターの方も半数位いらっしゃいました。昼前から小雨がパラついてきたので、帰館しました。大浜海岸からコバルトビーチまで起伏のある細道を歩きましたので、水産大学の「水の生き物研究部…アクラス」から六名の若い学生たちが配慮の必要な参加者の歩行等を援助してくれました。館へ戻り、温かい飲料を飲み、昼食をとりました。午後は貝合わせです。先生のテキストを参考にしながら貝の名前を見つけ出したり、難しい場合は、直接先生に聞いたりしてラベルに書き込んでいました。今回の貝合わせについては、皆さん熱心に長時間にわたり取り組まれました。来年もまた、お待ちしております。